

性解放理論の批判と純潔の理念の提案

日本統一思想研究院 大谷明史

序

2015年9月30日に東京で開催された平和政策所主催の講演会において、米紙ワシントン・タイムズ記者のシェリル・ウェツスタインが、「米国における同性婚— その経緯と展望 —」と題して、次のように述べました。

同性婚を合法化した「オーバーゲフェル裁判」の背景：

原告の同性愛者らは、中部のオハイオ州、ケンタッキー州、テネシー州、ミシガン州の結婚法を連邦最高裁が破棄するよう求めた。原告らが結婚法を嫌ったのは、その中に結婚は「一人の男性と一人の女性の合一」という文言があり、同性カップルや一夫多妻の家庭、成人と子供の結婚などを排除していたからだ。重要なことだが、米国の多くのメディアは同性愛者の権利を擁護する活動に同調し、これらの州の結婚法は「同性婚禁止法」であるとレッテル貼りした。……

1960年代には『プレイボーイ』誌が性革命を牽引し、経口避妊薬、婚前交渉、さらには婚外交渉までも容認する文化が広がった。こうした婚外の性行為によって婚外出産が増加し、現在米国における出産の40%をシングルマザーが占めるようになった。また米国の十代後半の若者のあいだで未婚の同棲も広がった。この「性革命」は、大きく二つの意味で結婚制度を侵食した。まず男性も女性も性交渉は結婚してからお互いの間で行うもの、という考え方が崩れた。さらに夫婦は結婚したら子供を作るもの、という通念も揺さぶられた。

そして1970年代にはもっとも大きな文化的変化、すなわち離婚をめぐる改革が全米に広がった。いわゆる「無過失離婚」という概念によって、夫婦は「相容れない違い」を理由にすれば、どちらに責任があるかを証明しなくても結婚生活にピリオドを打てるようになった。これによって数百万件の離婚が成立し、結婚は永続的なものという考え方は崩壊した。

……

合衆国憲法は結婚に触れておらず、あるいは結婚を連邦政府が扱う問題として委任しているわけでもない。結婚は諸州または国民が決めるべき問題だということだ。しかしそうであれば、連邦最高裁はなぜ、結婚が一人の男性と一人の女性の間のものと規定したすべての州法を無効とする権限を行使できたのか。それは5人の判事たちが、修正第14条の平等保護と適正手続きに関する条項の下で、同性カップルにも結婚という基本的権利への平等なアクセスが与えられるべきことが示唆、または推論される、という合意をしたからである。さらに、もし修正第14条が同性婚の合法性を示唆しているのであれば、連邦最高裁には諸州の決定を覆してそれを認めさせる権限があると判断したのだ。

では修正第14条とは何か。それは今から一世紀以上も前の1868年、南北戦争後に元奴隷や他の黒人たちに市民権を与えるために制定された。修正第14条が諸州に対して言っているのは、いかなる州も「法の適正な過程によらずに、その生命、自由または財産」を何人からも奪ってはならず、また何人に対する「法の平等な保護」をも否定してはならない、ということだ。この修正条項と「自由」という言葉は、同性婚を合法化した5人の連邦最高裁判事にとってきわめて重要な

ものであった。……

シェリル・ウェツスタインは、米国は今や、大規模な文化戦争に突入したと言い、今後の動向について、次のように述べています。

こうして米国はすでに、いつ果てるとも知れない大規模な文化戦争に突入した。筆者は個人的には、その闘いが同性愛者の親に育てられた子供たちが成人するまで、そして自らの人生体験を語れるようになるまで、これから15年以上にわたって続くと考えている。大人になった子供たちが、同性婚は有益か否かについて、いつか決定的な答えを示してくれるだろう。

しかし、これでは遅すぎると言わざるを得ません。その間、同性愛はどんどん拡大を続けるであろうし、社会の混乱と、その子供たちの犠牲が生じるからです。ここに、崩れゆく伝統的価値観が、本来、神から人間に与えられたものであり、それが今も、有効であることを示すことが、なによりも、重要な課題です。それはシェリル・ウェツスタインが指摘している、次のような価値観であります。

「結婚は一人の男性と一人の女性の合一である」

「男性も女性も性交渉は結婚してからお互いの間で行うもの、夫婦は結婚したら子供を作るもの」

「結婚は永続的なもの（不倫をしてはいけない、離婚してはいけない）」

I. 人間に与えられた神の言

人間社会における倫理、道德の起源は神から与えられた戒めの言です。

一、 人間墮落に関する聖典、神話の物語

(一) ユダヤ・キリスト教の失楽園物語

聖書の創世記には次のような失楽園の物語があります。

エデンの園の中央に生命の木と善悪知る木があった。神はアダムとエバに善悪知る木の実を食べたら死ぬと警告された。へびがエバにささやいた。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪知る者となることを神は知っておられるのです」。エバはその実を食べ、アダムにも食べさせた。それを知った神は、彼らをエデンの園から追い出された。

(二) イスラム教の失楽園物語

『コーラン』には、次のように書かれています。

「アダムよ、おまえと妻とはこの楽園に住み、ほしだけ食べよ。しかし、けっしてこの木に近づいてはいけない。さもないと、おまえたちは不義を犯すことになる」ところがサタンは二人にささやいて……言った、「主がおまえたちにこの木を

禁じたのは、おまえたちが天使になり、あるいは不死身となるのを恐れたからにほかならない」

こうして、彼は二人を惑わしてしまった。二人がその木を味わったとき、その隠し所はあらわになったので、楽園の木の葉でおおい始めた。主は彼らに呼びかけたもうた、「わしはおまえたちにあの木を禁じ、『サタンはおまえたちの公然の敵だ』と言っておいたではないか」(『コーラン』7:19-22)

『コーラン』に書かれていることも、ユダヤ・キリスト教の「失楽園」の物語とほとんど同じであることがわかります。

(三) ギリシア神話

(1) パンドラの箱

プロメテウス (Prometheus) が天界の火を盗んで人間に与えたことに激怒したゼウス (Zeus) は、「火の償いとして、人間どもに災いを与えよう」と言って、鍛冶神ヘパイストス (Hephaestus) に命じて、粘土から女神に似せた美しい女を創らせました。ゼウスはその女に、「神々の贈り物である女」という意味のパンドラ (Pandora) という名を与えました。こうして最初の女パンドラは罰として人間に与えられたのでした。

パンドラは神々の贈り物をつめこんだ箱を持っていました。それを開けることは、神々から固く禁じられていましたが、パンドラは好奇心にかられて開いてしまいました。するとそこから、病気、苦痛などあらゆる災いが飛び出して、人間の間蔓延することになりました。人間の最初の女であるパンドラが、禁じられた箱を開けたことが災いの元になったというのです。

(2) オルフェウスとエウリュディケ

アポロン (Apollo) の息子オルフェウス (Orpheus) は、父から豎琴をもらい、豎琴の名手となり、人間だけでなく、動物をも魅了するほど美しい音を奏でました。彼は、美しい娘エウリュディケ (Eurydice) と結婚しましたが、ある日、エウリュディケが散歩をしていると、牧者アリストaios (Aristaeus) が、彼女の美しさに心を奪われ、彼女を襲ってきました。逃げる途中、エウリュディケは蛇に噛まれて死んでしまいます。オルフェウスは、黄泉の国の支配者ハデス (Hades) のもとへ行き、エウリュディケを連れて帰りたい、と願い出ました。ハデスは二人が地上へ帰りつくまで、彼女をふりむいてはならない、という条件で願いを聞き入れました。二人は暗い小道を通過して、とうとう地上へ着こうかというとき、オルフェウスは彼女がついて来ているかどうかと、つい振り返ってしまいました。すると、たちまち彼女は黄泉の国へ吸い込まれるように消えてしまったのです。

詩人オルフェウス
とエウリュディケ



(3)オルフェウスとナルシスのエロスの世界

愛するエウリュディケが再び黄泉の国へ消えてしまった以後、オルフェウスは、あらゆる女をさげ、若い少年たちを愛しました。オルフェウスは、同性愛の始まりとも結びつけられています。

ギリシア神話には、水面を見ると、中に美しい少年がいたので、自分の姿とも知らず、それを見つめながら死んだナルシス(Narcissus)が登場します。マルクーゼによれば、オルフェウスとナルシスの世界は、自由の世界、エロスの解放、ニルヴァーナであると、賛美しています。オルフェウスとナルシスの世界は、完全なエロスを求めるために、正常なエロスを斥け、秩序を否定します¹。かくしてギリシア神話の中には、フリーセックス、同性愛を美化する、墮落した愛の世界が描かれていたのです。

(四) 日本の神話

(1)イザナギとイザナミ

イザナギ(男の神)とイザナミ(女の神)が天の御柱を回って夫婦の交わりをしました。そのとき、イザナミが先に唱えて(先導して)交わったところ、不具の子が生まれたので、その行為が間違っていたことを悟り、やり直して、今度はイザナギが先に唱えて交わったところ正常な世界が生まれたとあります。この物語も人類の最初の女性に過ちがあったことを示唆しています。

¹ ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』156頁。



酒井倫子著『神話かるた絵ことば』29頁

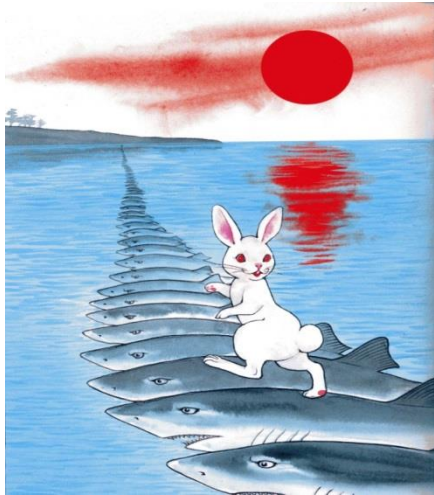
その後、イザナミは火の神を生んだことから陰部が焼けて死んで、黄泉の国へ旅立ちました。イザナギが妻の後を追って黄泉の国へ行き、妻を待ちくたびれて、入ってはいけないと言われた御殿の中に入っていくと、全身にうじが湧き、八体の雷神のとりついた妻の姿がありました。イザナギは逃げて、九州のあわぎ原で「みそぎはらえ」をおこないました。

(2) 因幡の白兔

『古事記』には、^{いなば}因幡の^{オオクニヌシ}白兔の物語があります。^{やそがみ}大国主命が八十神とよばれる兄たちと、^{やがみひめ}八上姫に求婚するために、^{けた}因幡の気多の岬にやってきました。そこにワニ(サメ)をからかって、皮をむかれて丸裸になって泣いている白兔がいました。

先に到着した兄たちは、白兔に、海水で体を洗うように言いました。そのようにしたところ、余計に痛くなって泣いていました。あとから到着した^{オオクニヌシ}オオクニヌシが、うさぎを哀れがり、清水で体を洗い、^{ガマ}ガマの穂綿にくるまるように言いました。そうしたら、うさぎは元の白兔になったのです。白兔が^{オオクニヌシ}オオクニヌシに「あなたこそ、^{ヤガミヒメ}ヤガミヒメをめとることができるでしょう」と言いました。

兄たちの嫉妬により、^{オオクニヌシ}オオクニヌシは根の国に逃れますが、そこで出会った^{スセリビメ}スセリビメと結婚します。そして^{ヤガミヒメ}ヤガミヒメとも結婚しました。



酒井倫子著『神話かるた絵ことば』57頁

(五) 仏教

今日まで、仏教においては、魔王が天上界（霊界）の霊的な存在か、それとも人間生命の内なる心の働きを擬人的に比喻したものかという問題が論じられてきました。

釈尊は、菩提樹の下で魔王と闘い、これを退けて降魔成道（成仏）されました。魔王は、命を奪い、^{くどく} 功徳を奪い、破壊し善を妨げ、^{ざんげん} 讒言するものです。魔王を天子魔^{てんじま}と呼ぶように、天界の霊的存在であると言えます²。

『法華経』には「久遠^{くおんほんぶつ}本仏」と人間の関係を父子の因縁で説く比喻が多くしめされています³。中国の天台大師知顛^{てんだいだいしちぎ}（中国天台宗の開祖）によれば、人間は本来、「久遠本仏」の本眷属^{ほんぜんじゆく}（一族）であるとされています。

ところが日蓮は「一切衆生は、無始以来、かの魔王の眷属なり」と、人間と悪魔の血縁関係を説いています⁴。すなわち、人間は本来、仏の一族であったのに、悪魔の一族になってしまったというのです。では、なぜ人類は魔王の一族になったのでしょうか？ それに関して、仏教では明らかにされていません⁵。

二. 聖人を通じて与えられた神の言

キリスト教を始め、伝統的宗教は、共通に、姦淫してはいけない、離婚してはいけない、同性愛はいけないと説いています。以下、代表的な宗教の規範を示します。

(一) モーセに与えられた戒め

シナイ山で、神がモーセにくださった十戒は次のごとくです。

²竹内清治『慈愛の先祖供養』賢人社、134-5頁

³同上、65頁。

⁴日蓮書簡の『兄弟抄』

⁵竹内清治『慈愛の先祖供養』賢人社、137-8頁。

- 第一戒：あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない
- 第二戒：あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない
- 第三戒：あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない
- 第四戒：安息日を憶えて、これを聖とせよ
- 第五戒：あなたの父と母を敬え
- 第六戒：あなたは殺してはならない
- 第七戒：あなたは姦淫してはならない
- 第八戒：あなたは盗んではならない
- 第九戒：あなたは隣人について偽証してはならない
- 第十戒：あなたは隣人の家をむさぼってはならない

姦淫、同性愛は特に厳しく戒められています。レビ記には次のように書かれています。

主はまたモーセに言われた、……

人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者があれば、その姦夫、姦婦は共に必ず殺されなければならない。……女と寝るように男と寝る者は、ふたりとも憎むべき事をしたので、必ず殺されなければならない。その血は彼らに帰するであろう。(レビ記 20/10-16)

(二) キリスト教

慈愛、寛容を強調する新約時代のキリスト教においても、不倫、同性愛を厳しく諫めています。

離婚してはならない

イエスは答えて言われた、「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ、そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」(マタイ 19:4~6)

更に、結婚している者たちに命じる。命じるのは、わたしではなく主であるが、妻は夫から別れてはいけない。……また夫も妻と離婚してはならない。(パウロの言、コリント I 7:10~11)

不倫をしてはいけない

「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え」(イエスの言、マタイ 19:18)

同性愛をしてはいけない

不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことにはないのである。(パウロの言、コリント I 6:9~10)

(三) イスラム教

イスラム法(シャリーア)は、コーランと預言者ムハンマドの言行(スンナ)に基

づいた法律であり、1000年以上にわたって運用されています。ローマ法を起源としな
いイスラム世界独自のものです。

イスラム法は旧約聖書の律法のように、厳格なイスラム社会では、不倫（婚外
セックス）や同性愛を行った者は死刑に処せられます。

（四） 仏教

原始仏教の経典には、「知者は淫行を回避せよ。……他人の妻を犯すことなかれ」、「己
が妻に満足せず、遊女に交わり、他人の妻に交わる——これは破滅への門である」と説
かれています。

総じて言うと、仏教では、夫婦以外の男女関係は破滅の門として厳しく戒められ、夫婦
の愛敬と家族の親睦すべき倫理を教えています⁶。

（五） 儒教

儒教には「自然界から学び、真理を得て、誠実に考え、心を正し、人格を養い、家
庭を正しく築き、国を正しく治め、平和で幸せな世界を築く」という八正道の教えがあ
ります。そして、家庭を正しく築くために、「貞操を守りなさい」という教えがありま
す。

Ⅱ. 神の言を否定する思想 vs 統一思想

今日、世界的に、倫理・道徳が大きく揺らいでいます。中でも性道徳の崩壊は目を
覆うばかりです。その結果、家庭の崩壊、各種の犯罪の蔓延が深刻な問題となっていま
す。

倫理・道徳の崩壊の背景にあるのは、伝統的な宗教的価値観の崩壊であり、それを
もたらしたのは、神を否定する唯物思想です。特に 19 世紀に生まれた強力な唯物論・
無神論、すなわち神の存在を根底から否定するマルクス主義、神の創造を否定するダー
ウィニズム、そして神の言（戒め）を否定するフロイト主義が猛威をふるっているの
です。

キリスト教道徳は、人間を奴隷のように貶める奴隷道徳であると言って、神の言に
反旗を翻したのはニーチェですが、性に関するキリスト教の規範に反旗を翻したのはフ
ロイトです。ここでは本論のテーマに沿って、フロイトから取り上げることにします。

一. フロイト主義

（一） 心の分析

（1）フロイトの分析

フロイトによれば、人間の心は本来イド（id, エス Es とも言う）である。イドは無
秩序で混沌としており、規律を無視して、ひたすら快感を求める。イドのみ人間は動
物的な存在である。イド（エス）の中からエゴ（ego, 自我）が生じる。エゴはイドの周
辺にある文明化された心である。さらに人間の心を根底から揺り動かしているのはリビ
ドー（libido, 性的エネルギー）であり、イド（エス）はリビドーの貯蔵庫である。つ

⁶竹内清治「仏教思想の概説」

まり、イド（エス）の中からリビドーが泉のように湧き出るということであり、アンソニー・ストー（Anthony Storr）が言うように、「性欲こそ人間のもっとも重要な駆動力なのである」⁷。フロイトの分析した心の構造を図示すれば図1のようになります。

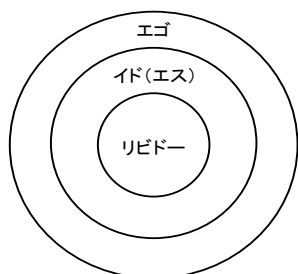


図1 フロイトの分析した心の構造

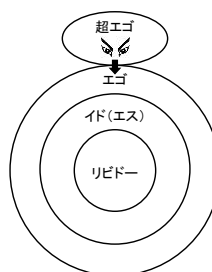


図2 超エゴによる監視

フロイトはさらに、超エゴ（super-ego, 超自我）が外部から人間の心を支配していると言います。超エゴは「こうあるべき」、「～してはいけない」といって、エゴを監視しているのです（図2）。フロイトのいう超エゴとは、幼児期に経験した父母（特に父親）からの叱責や、キリスト教封建道徳によるものです。

(2) 統一思想から見た人間の心

人間の心は霊人体を基盤とした生心と、肉身を基盤とした肉心との統一体です。生心は真善美と愛を追求する心であり、肉心は衣食住と性的欲求を追求する心です。生心と肉心は本来、主体と対象の関係にあり、肉心は生心に従わなくてはならないのですが、墮落した人間においては、肉心が主体になり、生心は肉心に引きずられていることが多いのです。

人間の心を根底から動かしているのは心情、すなわち愛したい、愛されたいという愛の衝動です。心情は心の最も深いところにあります。真の愛の心情を中心とするとき、肉心は生心に自然に従うようになり、生心と肉心は共鳴します。そのような心の本心と言います。統一思想から見た人間の心の構造は図3のようになります。

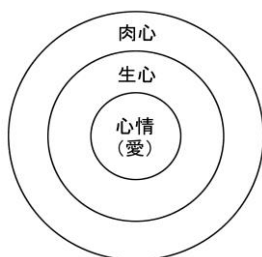


図3 統一思想から見た心の構造

(3) 統一思想から見たフロイトの「心の構造」への批判

フロイトは、人間の心の中でエゴ（自我）とイド（エス）が闘っていると見ましたが、統一思想の観点からいえば、フロイトは生心と肉心の間を捉えたといえます。しかしながら、そこには次のような問題点があります。

動物的、本能的な心であるイド（エス）から、いかにしてエゴ（自我）が生じるの

⁷ アンソニー・ストー、鈴木 晶訳『フロイト』講談社、1994年、124頁。

でしょうか？ 動物にはなぜエゴ（自我）が生じないのでしょうか？ フロイトによれば、イド（エス）は悪しき衝動であって、猛獣の住むジャングルのように、ジャングルの片隅に開拓地のようなエゴが生まれるのであり、エゴでもってイドを抑圧すべきであると言いますが、それではいつまでも、イドは悪しき衝動のままであり、人間は本来的に野蛮な動物的存在ということになります。

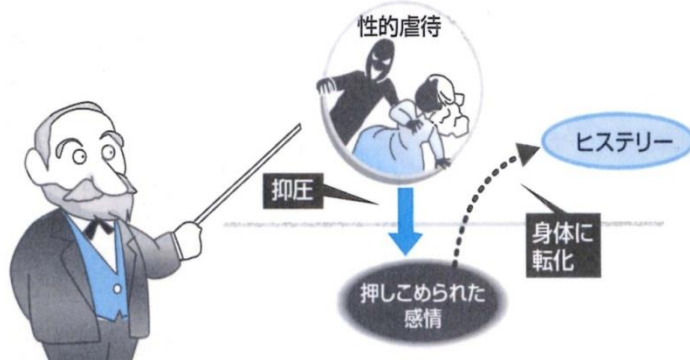
（二）初期フロイト

フロイト当時、ヒステリーという不思議な病気がありました。「ヒステリーとは、簡単にいうと、器官に異常がないのに、記憶喪失、幻覚、口がきけない、麻痺、けいれん、感覚がなくなる、といった症候を示す病的状態のことです。フロイトはこの病気の原因を、心の中の「抑圧」された感情が、後に身体に転化したものであると考えました。

フロイトによれば、人間の心を根底から動かしているのは性的な衝動（リビドー）であるが、幼児期の性的虐待や結婚生活における性的フラストレーションなどによって、心の奥深くに傷が生じている。しかし性を罪悪視するキリスト教道德の下で、患者はその心の傷を忘れようとして、その記憶を意識の外（無意識）に追い出してしまう。それがフロイトのいう「抑圧」(repression)です。

(1) 性的外傷説 (Theory of Sexual Trauma)

フロイトは初め「幼児期における性的虐待が神経症の原因である」と考えていました。



小谷野博『図解雑学・精神分析』p. 135 より

キリスト教道德が超エゴとなってエゴを支配し、抑圧的になったエゴがイド（エス）を強圧的に支配する。その結果、抑圧された人間が神経症やヒステリーになっていると見ました（図4）。そこでフロイトは、患者の心の深層を探り、抑圧の事実を明らかにして、患者の心を解放することによって、患者は治癒されると考えました。当時のキリスト教は、性を悪なるものであると断罪していました。そのような封建的道德に対してフロイトは反旗を翻したのです。

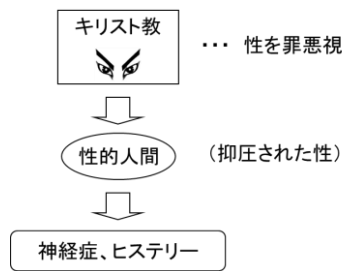
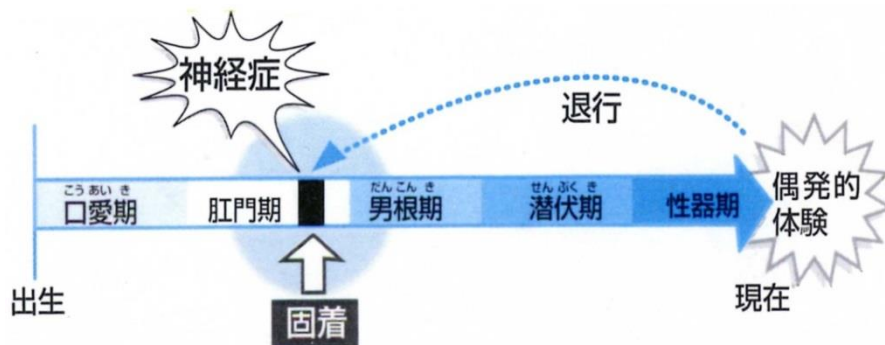


図4 抑圧された性による神経症

(2) 心的外傷説 (Theory of Psychic Trauma)

ところが患者の幼児期の性的虐待は、必ずしもすべての患者に当てはまるものではありませんでした。その後、フロイトは性的エネルギーであるリビドーの意味を、生理的欲求というように拡大しました。けれどもリビドーの根底にあるのはあくまで性的な衝動であって、幼児にも性欲があり、それは年代とともに変化していくと考えました。それが幼児性欲説です。

やがてフロイトは初期の性的外傷説に代えて、神経症とは、幼児期の心的外傷（トラウマ・心の傷）によってもたらされた、リビドーの固着点へ「無意識」に退行して起きる現象であるという、心的外傷説に基づく神経症理論を唱えました。



小谷野博『図解雑学・精神分析』p. 137 より

リビドーの発達段階のどこかで、リビドーが満たされなかったり、拒絶されたりして、リビドーの発達のどこかに固着 (fixation) があった場合、それが後の偶発的体験が契機となって、固着点に退行するとき、それが神経症として現れるというのです。つまり幼児期における心の傷——心的外傷 (トラウマ) ——と後の偶発的な外傷的体験とが、互いにそろった時、神経症という目に見える形になって現れるのだというのです。

フロイトによれば、人間の幼児期から現在に至るまでに生じたリビドーの傷 (固着) が神経症の原因です。しかし統一思想から見れば、人間を根底から動かしているのは性的エネルギーではなく、心情——愛したい、愛されたいという衝動——です。したがって、人間の心の傷となって神経症を引き起こしている本質的なものは、幼児期の心的外傷によるリビドーの固着ではなく、心情の傷であり、愛の傷です。心的外傷によるリビドーの傷も、傷の一部をなしているとしても、それがすべてではないのです。より根本的には愛の傷です。すなわち父母、兄弟姉妹、上司、同僚、友人などの周囲の人たちから冷たくされたり、虐待されたり、あるいは彼らの期待に答えられなくて挫折したこと

などによる愛の傷が原因なのです。

さらに心理的な問題は、幼児期の体験のみならず、霊界の先祖たちまで、さかのぼります。すなわち、われわれの心の傷は、幼児期の心の傷のみならず、先祖たちの心の傷（悲しみ、怨み、憎しみなど）も加わっているのです。したがって心の病気の解決は、個人の幼児期からの精神的な治療だけでは不十分であり、霊界までさかのぼって、先祖たちの心の傷を解決することまで、なされなくてはならないのです。先祖たちの心の傷には、他人から受けた傷と他人に与えた傷があります。他人に与えた傷は、傷を受けた人（霊人）の怨念が傷を与えた人の子孫にふりかかってくるのです。したがって、そこに先祖供養や先祖解怨の意義があります。

（三）後期フロイト

フロイトの弟子の中から、人間は本来、性的存在であり、性を抑圧するから神経症になるのであって、性を解放することによって、人間は本来の姿に戻るといふ、フロイト左派の性解放理論が生まれてきました。

しかし、イド（リビドー）を解放した人間は野生の動物的存在でしかありえません。野生の動物は勝手に異性と関係をもち、性のために闘い、殺しあったりします。フロイトは人間がそのような野蛮な状態になることを恐れたのです。そこでフロイトは、イドからエゴ（自我）が生まれてくるとして、人間は自らエゴによってイドをコントロールすべきであると主張しました。

イドは盲目的な、動物的要求が宿っている所であり、人間精神の原始的な場所であり、暗いジャングルである。エゴはジャングルの周辺にある文明化された所、ジャングルの開拓地である。フロイトによれば：

○ われわれ、すべての人間のなかに野蛮人（イド）がいる⁸。

○ 自分の中に荒れ狂っている強い衝動（イド）を操る力（エゴ）を発展させねばならない⁹。

フロイトはイドとエゴの関係を暴れ馬と騎手の関係にたとえています。熟練した騎手によって、暴れ馬をよく操れば、馬は素直に騎手に従うようになるというのです。イドは心の中のオオカミということもできます。オオカミが暴れないように抑えなさいということです。

人間を抑圧しているキリスト教道徳を否定せよ。他方、人間の中の野蛮な心であるイド（エス）を自律的、合理的なエゴで抑圧しなくてはならない。すなわち、「イド（エス、悪しき衝動）と超エゴ（封建道徳）に対して、ともに闘う」というのがフロイトの結論でありました（図5参照）。

⁸ ラッセル・ベイカー、宮城音弥訳『フロイト・その思想と生涯』講談社、1975年、199頁。

⁹ 同上、198頁。

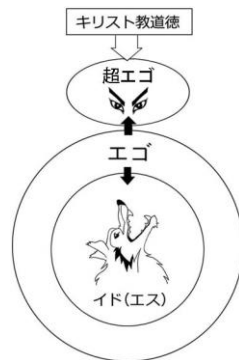


図5「イドと超エゴに対して、ともに闘う」

フロイトは、封建主義的、専制的なキリスト教道徳による性の抑圧（タブーと偏見）から人間を解放せよと言って、絶対的な神の言（戒め）を否定しました。そして自律的、合理的なエゴを確立せよと言いましたが、いわば「性の民主主義」を主張したのです。

（四）フロイト左派の性解放理論

人間は本来、性的な存在であるというフロイトの立場から、性を抑圧するから人間は神経症になるのであり、性を解放することによって、人間は本来の姿に戻るというフロイト左派が生じました。野生の動物を檻に入れたり、鎖につながから、異常をきたすのであって、「野生の動物は野生のままに！」というのです。その代表的人物がライヒ、マルクーゼです。

（1）ライヒの性欲理論

ライヒは、性的な満足（オルガスム）を得ることによって、神経症は治ると主張します。彼は『性と文化の革命』の中で次のように言います。

- 人間の感情や思考の構造を支配しているのは性のエネルギーである。¹⁰
- 快楽はわるいことではない、いいことだとみとめ、性について罪悪感を持たないことだ。¹¹
- 性の幸福をまったく、実際に、肯定する。¹²

（2）マルクーゼのエロス文明

マルクーゼは、文化のエネルギーは性欲から来るとして、非抑圧文明であるエロス文明の到来を宣言しました。そして、彼はクライスト（Heinrich von Kleist）の言葉、「われわれは、罪のない状態にたちもどるためには、もう一度知恵の木の実を食べなければならない」を引用しながら、「『原罪』はふたたびおかせねばならない」と主張したのです¹³。

マルクーゼの思想はギリシア神話に大きく影響されていました。マルクーゼによれば、ギリシア神話のオルフェウス(Orpheus)とナルキソス(Narcissus)というイメージは、エロ

¹⁰ ウィルヘルム・ライヒ、中尾ハジメ訳『性と文化の革命』勁草書房、1969年、xi頁。

¹¹ 同上、6頁。

¹² 同上、245頁。

¹³ ハーバート・マルクーゼ、南博訳『エロスの文明』紀伊国屋書店、1958年、180頁。

スとタナトスを和解させ、エロスを解放するものであるという。彼は『エロスの文明』の中で、次のように言います。

彼らは、支配もコントロールも受けずに、解放されている世界の体験を思い出させる。そのような世界は、自由の世界であり、そこでは、抑圧されて硬化した、人間と自然のさまざまなかたちにしぼられていたエロスが解放されて、その力を発揮するのである。エロスの力は、破壊的ではなく、平和であり、恐怖をおこさせるものではなく、美をよびおこす。その力がはたらく秩序を明らかにするには、ただいくつかの組みあわされたイメージを数えあげるだけで十分であろう。快楽の償い、時間の停止、死の吸収、沈黙、眠り、夜、楽園、つまり、ニルヴァーナ原則は、死としてでなく生としてある。¹⁴

マルクーゼはオルフェウスとナルキソスの世界を、自由の世界、エロスの解放、ニルヴァーナとして賛美しています。マルクーゼによれば、

われわれは想像力のいくつかの原型、つまり、抑圧による生産性をあらわしている文化の英雄〔フロイト〕たちと対照をつくる、創造的な享受性を象徴化した原型をよびおこした。……オルフェウス・ナルキソスのイメージの代表している内容は、秩序が美であり、仕事が遊びであるような美的な態度で、人間と自然をエロスの的に和解（結合）することであると、われわれは考えた。¹⁵

オルフェウスとナルキソスの世界は、完全なエロスを求めるために、正常なエロスを斥け、秩序を否定します。オルフェウスは、同性愛の始まりとも結び付けられています。マルクーゼによれば、

この古典的な伝説で、オルフェウスの名は、同性愛の始まりと結びつけられている。彼は、……より完全なエロスを求めるために、正常なエロスを斥ける。ナルキソスのように、彼も生殖的な性欲の抑圧的な秩序に抗議する。オルフェウスとナルキソスのエロスは、けっきょく、この秩序の否定、つまり、偉大なる拒否である。¹⁶

マルクーゼは、さらに「肉体的な愛にはじまって、ひとりの対象からつぎの対象へと、エロスの充足は上昇をつづけ、……高次の文化への道は、少年の真の愛情を通して、開けている。……エロスの文化をつくる力は、非抑圧的な昇華である」¹⁷と言います。つまり、肉体的な愛、移りゆく愛、同性愛を通じながら、エロスが上昇し、非抑圧的なエロス文明が実現されるというのです。

(3)フロイトへの批判

i. フロイト左派が生まれた

人間を本来、性的な存在と見ることから、自然の成り行きとして、「性の解放」（フリーセックス）を主張するフロイト左派が生まれました。

ii. 「性の自己決定論」に道を開く

¹⁴ 同上、149 頁。

¹⁵ 同上、160 頁。

¹⁶ 同上、156 頁。

¹⁷ 同上、191 頁。

フロイトは絶対的、普遍的な規範——神の戒め、ロゴス、天道など——を否定することにより、性行動の決定は個人の意思にまかせるべきであるという‘性の自己決定 (self-determination)’の主張に道を開いたのです。

(五) 神の言 (戒め) の否定

フロイトによれば、キリスト教道徳は絶対的な父権を中心とした権威体制の反映であり、強迫観念的な規範である。すなわち、一種の権威的、抑圧的な「掟」であり、「タブー」にすぎない。かくしてフロイトは神の言 (戒め) に基づくキリスト教道徳を「抑圧としての規範」として否定したのです。

一方、フロイト左派は、人間は性的に抑圧されることによって、本来の姿を失っていると見ました。したがって、性を抑圧する規範は人間を貶めるものです。すなわち、神の言 (戒め) は、「有害なもの、廃棄すべきもの」です。それは正に倫理・道徳の破壊の理論でありました。

二. マルクス主義

マルクス主義は徹底的な唯物論であって、神の存在を否定し、神の言を信じません。それは次のようなレーニンの言葉に明らかに示されています。

ブルジョアジーは、この倫理を神の掟から引きだしている。……われわれは神を信じない。そして、聖職者、地主、ブルジョアジーが、神の名でかたってきたのは、自分たちの搾取者としての利益を実現するためであったことを、よく知っている… …このような超人間的・超階級的な概念から引きだされた倫理を、われわれはすべて否定する。これは欺瞞である、それはすべてである、地主と資本家の利益のために、労働者と農民をたぶらかすものである¹⁸。

マルクス主義には、純潔や一夫一婦制の理論的根拠はありません。理論的には性解放であって、結局は性解放へと向かわざるをえないのです。マルクスは『共産党宣言』の中で次のように言います。

家族の廃止！もっとも急進的な人々さえ、共産主義者のこの恥ずべき意図に対しては、激怒する。……共産主義者のいわゆる公認の婦人共有におどろきさわぐ、我がブルジョアの道徳家振りほど笑うべきものはまたとない。……共産主義者は偽善的に内密にした婦人の共有の代りに、公認の、公然たる婦人の共有をとり入れようとする、とでもいったらよからう¹⁹。

これはブルジョア的な関係から生じる「偽善的な婦人の共有」は消滅し、共産主義的な公然たる「婦人の共有」になるということ、すなわち一夫一婦制の廃止とフリーセックスを公然と宣言するような発言です。マルクス主義では、家庭は階級支配の原点であると見ています。つまり、夫はブルジョア、妻はプロレタリアであり、夫が妻を支配し、搾取しているというのです²⁰。

¹⁸ 『レーニン全集』第31巻、大月書店、288頁。

¹⁹ マルクス＝エンゲルス、大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波書店＝岩波文庫、1971年、63-65頁。

²⁰ 『家族・私有財産・国家の起源』

結局、マルクス主義は家庭を否定します。その結果は、愛の秩序も性の秩序もなくなり、性解放の社会にならざるをえないのです。文師は、次のように語っています。

共産主義は神がいないと否定しています。また、宗教をアヘンだといい、宗教を中心とした家庭を否定しています。これはサタンが宗教と宗教を中心とした家庭を通して、自分を屈服させようとなさる神様のみ旨を知って、共産主義を通して宗教と家庭を否定しているのです²¹。

エンゲルスの夫婦観は次のようです。

愛にもとづく婚姻だけが道徳的であるなら、同じく愛の存続する婚姻だけが道徳的である。しかし、個人的性愛の発作の持続期間は、個々人によって非常に相違する。とくに男のばあいはそうである。そして、愛着がまったくなくなるか、あるいは新しい情熱的な恋愛によって駆逐されたばあいには、離婚は当事者の双方にとっても社会にとっても善行である²²。

男女の愛を性愛の関係のみで捉え、個人的性愛の「発作の持続期間」が個々人によって相違があるから、愛着がなくなれば、さっさと離婚したほうがよいというわけです。このようなエンゲルスの共産主義的家族論は、まさに家庭崩壊を助長するものであり、フリーセックス社会を導くものです。毛沢東も、共産主義下では家庭は崩壊すると言いました²³。

愛は家庭の基盤であり、愛は神に由来するものです。したがって家庭を認めれば、結局、神を迎えるようになります。したがってサタンが役事する共産党は、家庭をなくして、家族をみなばらばらにして、人民公社のようなところで共同の生活をさせて、共同で生産活動にいそむるように導きます。けれども、そこには人民の代表と称する共産党がいて、人民を支配します。そして、神を否定する共産党ですから、その背後からサタンが働き、サタンが人民を支配するようになるのです。

三. ダーウィニズム

進化論の観点から見た自然界は、冷酷であって、生物の進化法則（適者生存）は非道徳的です。したがって、進化論において、規範の根拠は不明です。適者生存の世界においては、人間社会においても、競争的、闘争的なフリーセックス社会にならざるをえません。

ダーウィンの進化論を強力に擁護して「ダーウィンのブルドック」と呼ばれたハクスリー（Thomas Henry Huxley）は、道徳や倫理は進化によって説明されるものではないということを認めました。そして彼は、道徳や倫理は進化とは別の原理によって説明されなくてはならないと言いましたが、その起源を明らかにすることはできませんでした。

四. フランクフルト学派

マルクス主義とフロイト主義を合体させたのが、ホルクハイマー（M. Horkheimer）、

²¹ 『南北統一』132-33。

²² 『家族、私有財産および国家の起源』国民文庫, 105-6 頁

²³ 楊継縄、伊藤正他訳『毛沢東・大躍進秘録』文芸春秋、2012年、156-58頁。

アドルノ (W. Adorno)、マルクーゼ (H. Marcuse)、ベンヤミン (W. Benjamin)、フロム (E. Fromm)、ハーバーマス (J. Habermas) 等のフランクフルト学派です。この思想が今日の文化共産主義の温床となっていますが、彼らは一様に、神のみ言、絶対的真理に反旗を翻しています。

(一) ホルクハイマーとアドルノ

ナチスを逃れてアメリカに亡命していたホルクハイマーとアドルノは 1941 年から共同で作業を始めて、1947 年に『啓蒙の弁証法』刊行しました。その中でフランクフルト学派の基本的立場を明らかにしています。

20 世紀にナチスによる悲惨なユダヤ人大量殺戮がおきましたが、「なぜ人類は真に人間的な状態に歩みゆく代わりに、一種の新しい野蛮状態に落ち込んでゆくのか」というところから、彼らは出発しています。そしてホメロスの『オデュッセイア』(Homer's [Odyssey](#))——トロイ戦争(Trojan War)で活躍し、故郷に帰る航海でセイレーン(Sirens)の魔術的な歌声などの誘惑に打ち勝ったオデュッセウス(Odysseus)が、やがて残虐な復讐の暴君になる物語——を題材にしています。

ホルクハイマーは同年、1947 年、『理性の腐蝕』を著しています。その中で、今日の産業文明における進歩的・技術的合理化によって理性が道具化したと見て、その理性を批判し、告発することこそ、今日の理性の最大の使命であると主張します。すなわち野蛮の源泉を腐蝕した理性にあるとして、理性によって理性を告発しようというのです。

アドルノによれば、腐食した理性が依拠しているのは、同一化、普遍化を目指す同一化原理であり、永遠性、普遍性の絶対的真理です。そこで永遠性、普遍性の真理を否定する「否定的批判の哲学」を提唱し、1966 年に『否定弁証法』を著しています。

結局、ホルクハイマーとアドルノによれば、理性自身の手で、より徹底した理性の自己批判を行い、真なる理性を取り戻すというのです。彼らは、自らの理性を真なるものとして、道具化した理性を批判するというのですが、はたして彼らの理性が真なるものか、その根拠は疑わしいものです。

統一思想から見れば、理性の背後には善なる欲望、または悪なる欲望があります。善なる欲望は真の愛に起因するものであり、悪なる欲望は偽りの愛に起因するものです。したがって理性は真の愛に基づいた理性でなければなりません。そういう意味で理性は本来、真の愛の道具なのです。ゆえに、理性の次元で理性を批判しても、事態の解決にはなりません。また、永遠性、普遍性の真理を否定するということは、神の言に基づいた絶対的真理を否定することにほかなりません。

フランクフルト学派は、その批判的精神の下で、西ドイツの反戦・反政府の学生運動に理論的根拠を与えましたが、彼ら(ホルクハイマー、アドルノ)はかえって急進的な学生たちから、行動が伴わないと批判される結果になりました。

(二) エーリッヒ・フロム

フランクフルト学派にフロイトの思想を持ち込んだのはフロムです。後にフランクフルト学派から離脱したフロムですが、マルクスとフロイトの思想統合を成し遂げてゆくうえで、重要な役割を果たしたのです。

マルクスによれば、疎外された労働を労働者の手に取り戻すことによって、労働者を解放すれば、理想社会すなわち共産主義社会になるというのですが、それだけでは野蛮な文明の到来は説明できませんでした。

マルクス主義だけでは説明のできない状況の解決のためには、伝統、家族関係、性などの無意識的深層心理が介入して人間の性格なり行動様式が決定されてくるという点に、注目せざるを得なくなりました。そこでファシズムを支える基盤となる人間の

「権威主義的性格」の解明が大きなテーマとなり、フロイトに準じて、それは性的な衝動を罪悪視し、抑圧する家父長制社会の道徳に由来すると考えたのです²⁴。

ここに‘内なる自然’である人間の内的な衝動に目を向けなくてはならなくなりました。つまりフロイトのいうリビドー的衝動です。道具化した理性による‘内なる自然’への圧政的暴力が行われることにより、それに対する‘内なる自然’の反逆がなされ、人間は‘内なる自然’によって、かえって支配されるようになり、その結果、ナチズムのような野蛮状態に落ち込むというのです²⁵。

ホルクハイマーとアドルノは、‘内なる自然’を抑圧する理性を批判したのですが、フロムは、‘内なる自然’である性の快楽を禁止する家父長制社会を批判し、性の快楽を禁止するところから来る罪意識や、キリスト教封建道徳に由来する超自我などの作用の少ない母権性社会を目指し、それが来るべき社会主義社会であると考えました。フロムが理想としたのは、パリ時代のマルクスの疎外論に示された人間主義的な社会主義思想でした。フロムは、フロイトのエディプス・コンプレックスから性的なルーツを抜き去り、自由と独立への成長を求める「進歩の道徳哲学」を目指しました²⁶。

フロムは、フロイトのいうエディプス願望を、「性的渴望」(リビドー)ではなくて、「保護され、安全でありたい、子供のままでいたい」という願望である、としました²⁷。しかし統一思想の観点から言えば、人間の心の核心にあるのは、性的衝動でもなく、保護されたい願望でもなく、心情、すなわち「愛したい、愛されたい」という、愛の衝動なのです。

(三) マルクーゼ

マルクーゼは、‘内なる自然’の解放すなわち本能の解放による、抑圧なき文明、エロス文明の到来を目指しました。彼は人間と自然がエロスの的に調和していた、ギリシャ神話の世界を理想としたのです。すなわち、「偉大なる拒否」(the Great Refusal)のイメージと言われているオルフェウスとナルシス、および彼らの同族である「神への反逆者」のディオニソスを理想としていました。まさに神のみ言に反逆する精神でありました²⁸。

マルクーゼは、アメリカのヒッピー族、反戦運動の青年たちの教祖として崇められました。しかしフリーセックスにより社会の退廃が深刻になると、彼は現代アメリカ社会の、「性の氾濫の擁護者」²⁹と見られるのを警戒して、「それは私の意見の全部ではない」³⁰と、責任のがれの発言をしています。

(四) ベンヤミン

ベンヤミンによれば、子ども時代の至福の経験とは、自然の対象との性的な交わりであって、エロスの衝動にもとづくものだと言います。そして彼は、そのような‘主体と対象が分離しない状態’を理想としたのです。ベンヤミンもマルクーゼと同様、‘内なる自然’が解放される状態を理想としたのです。

芸術についてのベンヤミンの理論は、シュルレアリズム (Surrealism, 現実主義) と直接に結びついていました。結婚をはじめとしてすべての礼会的規律に反対していたベン

²⁴ 徳永恂『現代批判の哲学』257。

²⁵ 小牧治『ホルクハイマー』176-77。

²⁶ 徳永恂『現代批判の哲学』274-6。

²⁷ 徳永恂『現代批判の哲学』275。

²⁸ 徳永恂『現代批判の哲学』280-81。

²⁹ ポール・ロビンソン、平田武靖訳『フロイト左派』せりか書房、1983年、240頁。

³⁰ 同上。

ヤミンは、シュルレアリズムの表現方法と、その理念に共感していました。

社会主義革命によって人類が解放されたならば、人類は過去の失われた瞬間をすべて回復し、あらゆるものが新鮮な驚きをもたらした幼年時代の楽園(エデン)におけるような生活をふたたび始めることができるであろうと、彼は考えました。

ベンヤミンはマルクス主義者であり、武装蜂起を密かに計画する革命家のようにもあり、シュルレアリスト(超現実主義者)でもありました。彼はナチスから追われ、フランスから脱出して、アメリカに亡命する途中、スペイン警察に拘留され、自ら死を選びました。

(五) ハーバーマス

フランクフルト学派の後継者となったハーバーマスは、政治的な公共性の領域において自由な政治的討論が発展して、人々が暴力的な支配から解放されることを民主主義の理念と見なし、この理念が近代社会を導いてきたと考えました。モノローグによる主観中心的理性からコミュニケーション的理性を目指したのです³¹。

そしてハーバーマスは、このコミュニケーション理論への理論的枠組(パラダイム)の転換こそが、批判理論の本来の目標である近代社会批判を続行していくことを可能にするものであると主張しました。すなわち、近代においては、理性の道具化だけが進展したのではなく、コミュニケーション的合理性も発展してきたのであって、その潜在力をきちんと評価すべきだというのが、ハーバーマスの立場でありました³²。そして、そこから彼の師であるホルクハイマーとアドルノの批判理論との訣別がなされたのです。

ハーバーマスのコミュニケーション理論は真理を、人間同士の合意によって決定するというものであり、まさに神の言の無視であり、真理の絶対的な基準を喪失したものであると言わざるをえません。

五. ポスト構造主義

フロイト主義は神の言(戒め)が人間を抑圧していると主張しますが、ポスト構造主義は、神の言のみならず、人間が通常使用している言(言説)も人間を抑圧していると言います(図6)。そして言語構造が人間と世界を決定しているが、その構造は差異、暴力、ノイズなどによって時代とともに変わると見ています。言説(discours, ディスクール)とは、ある言明や信念を言いますが、それは言表(énoncé, エノンセ)の集合からなるものです。ポスト構造主義は、言語構造の中にマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の作用を見ています(図7)。

- 言語構造の中に権力が潜んでいる。(マルクス主義より、フーコー Foucault)
- 原語構造はゆらぎ、ノイズなどによって時代とともに変わる。(ダーウィニズムより、デリダ Derrida)
- 言語構造の中にキリスト教封建道徳が作用しており、人間を抑圧している。(フロイト主義より、ラカン Lacan)

³¹ 小牧治・村上隆夫『ハーバーマス』161-2。

³² 細見和之『フランクフルト学派』182-3。

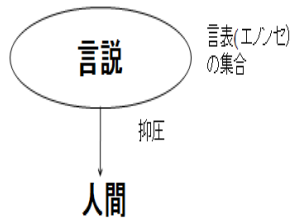


図6 言(言説)による人間の抑圧



図7 言語構造の中に潜んでいる抑圧の作用

結局、ポスト構造主義の土台は、マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義なのです(図8)。

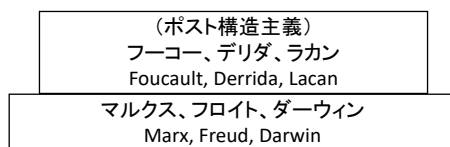


図8 ポスト構造主義の土台

統一思想から見れば、言説は本来、人間を抑圧するものでなく、真の愛へと導く愛の道です(図9)。しかし、墮落した人間の言葉には、神とサタンが作用しています。サタンの言葉を分別して、神の言から来ている規範(倫理・道徳)に従うべきなのです。



図9 言は本来、真の愛へと導く愛の道

六. ポストモダン・フェミニズム

ポストモダン・フェミニズムは、さらに言(言説)が女性を抑圧していると主張しています(図10)。すなわち、言(言説)が家父長的、男根中心的になっていて、女性を抑圧するものとなっていると言います(図11)。そして、女性中心の言語を造り、女性の快楽(ジュイサンス、*jouissance*)を目指すと言います。

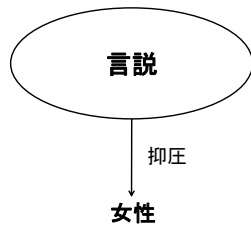


図10 女性を抑圧している言(言説)

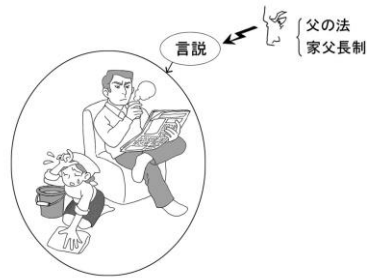


図11 女性を抑圧する家父長的言(言説)

ポストモダン・フェミニズムは、これまで言語をもたなかったもの——家父長制文化によって抑圧されてきた女性性——を書き記すと言い、女性中心の言語、「エクリチュール・フェミニン」(*écriture féminine*) を唱えます。

このようなポストモダン・フェミニズムに対する統一思想の見解は次のようです(図12)。

- 女性性中心の言語と文化を築くのではなくて、男女が調和した言語と文化が築かれるべきである。
- 女性だけで女性特有の快樂は得られない。男女の真の愛において、女性の快樂も男性の快樂も得られるのである。
- 神の言は、男女が共に愛しあい、共に喜ぶ、真の夫婦の愛へと導くものである。

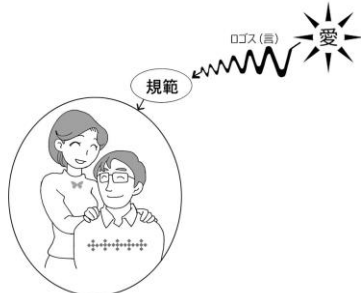


図12 真なる夫婦愛へと導くロゴス(言)

七. クィア理論

クィア理論 (Queer Theory) は、ジェンダー (性) は言 (言説) によって造られたものであるから、ジェンダーを攪乱せよと叫びます。代表的な思想家がジュディス・バトラー (Judith Butler)、イヴ・コゾフスキー・セジウツィック (Eve Kosofsky Sedgwick) です。クィアは、あらゆる形態の性の規範化に反対するさいの用語とされ、性規範に関するあらゆる枠組みに疑問を投げかけています。

バトラーは、ジェンダーという概念を攪乱すること、すなわち「アイデンティティの基盤的な幻想となることでジェンダーを現在の位置にとどめようとする社会構築されたカテゴリー」を「流動化させ、攪乱、混乱させ、増殖させることによって、ジェンダー・トラブルを起こしつづける」³³と主張しています。このような主張は、デリダによる言説の攪乱と軌を一にするものであり、さらにはダーウィニズムの突然変異による種の攪乱と軌を一にするものです。

³³ ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』73頁。

統一思想の観点から言えば、神は生物を種類に従って創られたように、男と女も明確な差異をもって創られたのです。そして男と女が肉体的にも、精神的にも、ハーモニーを描きながら愛し合うとき、男も女も真の喜び（快樂）を得ることができるのです。

八．女性解放運動と神の摂理

二十世紀における女性解放運動は、本来、神の摂理に適うものでした。ところが女性解放運動から、女性中心の言語を造ろうとか、男女の性差を攪乱し、性差をなくそうとか、男性の支配から独立しようなどという、過激なフェミニズムが生じてきました。そこで文師は、健全な女性運動を推進するために、夫人の韓鶴子女史と共に、1992年に「世界平和女性連合」を創設しました。文師は、次のように語っています。

人類歴史はエバの墮落を女性たちが先頭に立って蕩滅する時代が来ることを摂理的に要求しています。二十世紀における男女平等の思想的風潮、また女性の真の解放を求める運動などは、女性が世界平和のために立ち上がって世界的に大きく活動する環境が造成されたことを意味しているのです。

このような神様の摂理をよく知っている私は、1992年4月に、私の妻と共に「世界平和女性連合」を創設しました。この連合の運動は、近い将来に世界万民が参加する「世界平和女性連合」の運動へと発展させ、真の愛を家庭の中で定着させることによって、理想世界、すなわち地上天国を建設するのです。今、女性の時代は、1990年代の世界的な趨勢であり、女性の愛と協調、和解、調和の精神が、世界平和のために歴史的な貢献を果たす時代であると言えます³⁴。

韓鶴子女史は、「世界平和女性連合」が推進する女性運動は、男女が相互に協力して、真の家庭を建設することを、その目的とすると語りました。

これまで私が繰り広げてきた世界女性運動は、男性の権威に対する挑戦や、女性の権利ばかりを強調するフェミニズム運動とは、根本的にその性格を異にしています。今まで西欧社会で発展してきた女性運動は、相克的で衝突的な西洋の闘争精神を反映したフェミニズム運動ですが、私たちの運動は、互いに相応的で相補的な東洋の調和の原理が土台になった、和合の女性運動なのです。男性たちにできないこと、すなわち女性たちだけができることを探し出し、男性たちと相互補完的に協力することによって、真の家庭を建設することをその理想としています³⁵。（下線は筆者）

九．性解放理論の崩壊

マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の土台の上にポスト構造主義が生まれ、その土台の上にポストモダン・フェミニズムが生まれ、その土台の上にキア理論が生まれました（図 13）。そしてそれらを背景にして、いわゆる文化共産主義の下で、今日、世界的に性解放理論が猛威をふるっているのです。したがってマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の根本土台が崩壊すれば、性解放理論も崩壊する運命にあります（図 14）。

³⁴ 『平和経』1368。

³⁵ 『平和経』948。

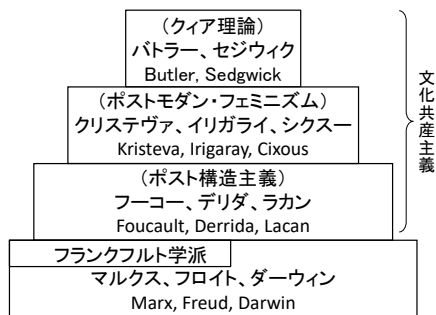


図 13 文化共産主義に基づく性解放理論



図 14 土台の崩壊による性解放理論の崩壊

ポストモダン・フェミニズム、クィア理論、ジェンダーフリー思想が崩壊すれば、純潔にもとづく真の男女の愛、真の夫婦愛を目指すようになります。そこでは男性による女性の支配、差別、虐待はなく、女性による男性に対する反抗もありません。男女が真の愛で共に喜ぶ、男女の真の平等が実現されるのです。そして真の家庭を基盤として理想社会、理想世界が築かれるのです。

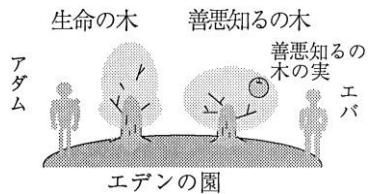
Ⅲ. 墮落論の解明—統一原理の墮落論—

聖典や神話に描かれていた人間墮落の物語は、象徴的に描かれていてベールにつつまれています。そこに秘められていた真実を文鮮明師は解き明かしました。それを簡単に紹介します。

一. 罪はいかにして生じたのか？

罪の根本原因は何でしょうか。

エデンの園の中央に生命の木と善悪を知る木がありました。神は、他の多くの木の実には自由に食べてよいが、善悪を知る木の実だけは絶対に食べてはいけないと、アダムとエバに戒めを与えました。



ここで問題になるのは、善悪知る木の果とは、文字通りの果物なのか、あるいは何かを比喩しているのかということです。人間は毒キノコと分かっていたら、そのキノコは絶対に食べようとしません。ですから善悪知る木の果が毒リンゴのようなものと分かっていたらアダムとエバは絶対に食べなかったことでしょう。とすれば、善悪知る木の果とは、死の危険をも忘れてしまう強烈な刺激を与えるものであったとみななければなりません。

(一) 生命の木と善悪知る木の意味するもの

生命の木とは創造理想を完成した男性、完成したアダムを意味していました。すなわち、生命の木という、植物の木が生えていたのではなく、アダムが神の戒めを守って完成した姿を象徴していたのです。すなわち、神はアダムが立派に成長して完成した姿を生命の木として思い描いていたのです。

そうするとエデンの園の中央に生命の木と共にあった善悪知る木とは何でしょうか？言うまでもなく、それはアダム共にいたエバの完成した姿を象徴していたのです。すなわち、善悪知る木は創造理想を完成した女性を意味していたのです。

(二) 蛇の正体は何か？

次に問題になるのは、エバを誘惑した蛇とは何かということです。

その蛇は人間と会話することができました。したがって、それは動物の蛇ではなくて、霊的な存在です。また「取って食べてはならない」と言われた神の意図を知っていました。

ヨハネの黙示録 12 章 9 節には、蛇は天から地に投げ落とされた存在であると書かれています。ここで天とは、善なる、聖なる所を意味し、地とは、悪なる、汚れたところを意味します。したがって、本来、天にいた善なる存在が、地に落ちて悪なる存在になったことを意味しているのです。そして今日にいたるまで、人間の心霊を支配し続けているのです。当時、アダムとエバ以外に存在していた霊的な存在とは天使以外にありません。結局、蛇の正体は墮落した天使なのです。

英語の聖書では、黎明の子、明けの明星について、“Oh! Lucifer! The Son of the dawn!”と書かれています。結局、「黎明の子、明けの明星」は、天使の中でも最も輝いていた天使長のルーシエルです。ルーシエル天使長が、神の命にそむいて、アダムとエバを墮落させて、自らは天から落ちて悪魔とか、サタンと呼ばれる存在になったのです。『コーラン』では、明確に、アダムとエバを墮落させたのは、蛇ではなくてサタンであると書かれています。

(三) 天使長と人間はどのような罪を犯したのか？

ルーシエル天使長がエバを誘惑して善悪を知る木の果を食べさせ、次いでエバがアダムに食べさせたことが罪になったというのですが、それはどういうことでしょうか？

(1) 天使の犯罪

天使長ルーシエルが天から地に落ちて悪魔(サタン)になったというのですが、天使の犯した罪とは一体、何でしょうか？

ユダの手紙 6 節～7 節には、「主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばりつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。ソドム、ゴモラも、まわりの町々も、同様であって、同じように淫行にふけり、不自然な肉欲に走ったので、永遠の火の刑罰を受け、人々の見せしめにされている」と書かれています。

ソドム、ゴモラの町は淫乱の町であって、ヴェスヴィオス火山によって滅びたポンペイのように、神の怒りによって、硫黄の火(火山)によって滅ぼされたのです。すなわち、ルーシエルを長とする天使たちの一群が淫乱にふけたというのです。

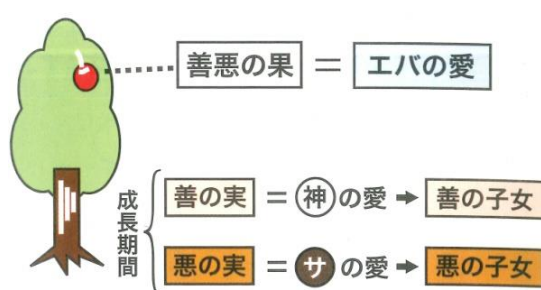
(2) 人間の犯罪

それではアダムとエバはいかなる罪を犯したのでしょうか？ 創世記 3 章 7 節には、アダムとエバは善悪を知る木の実を食べる前は裸であっても恥ずかしいとは思っていなかったが、食べた後で「ふたりの目が開け、自分たちの裸であることが分かったので、いちじくの葉をつづりあわせて、腰に巻いた」とあります。人間は罪を犯した部分を隠そうとする本性があります。食べてはいけないと言われていたお菓子を食べた子供は、口のまわりを拭きます。ところが、アダムとエバはいちじくの葉で下部を覆ったのです。それは下部で罪を犯したこと、すなわち性的な行為で罪を犯したことを意味しているのです。

(四) 善悪知る木の果とは何か？

すでに見てきたように、エデンの園の中央にあった木は人間を象徴していました。木は実を中心として繁殖しますが、人間は愛の器官を中心として繁殖します。したがって善悪知る木の実とは、エバの愛の器官、すなわち子宮を意味していたのです。天使長にそそのかされて、善悪知る木の実を勝手に食べたことが罪になったのです。「食べる」ということは「性的な関係を結ぶ」ことを意味していたのです。

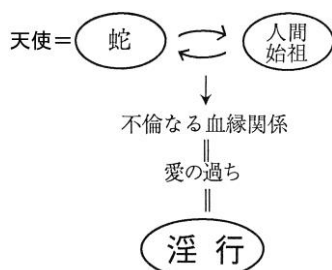
神が許可するまでは善悪知る木の実を食べることは出来なかったのです。本来、アダムとエバは神のみ言を守って、成長すれば、神は二人を祝福して、結婚させるようになっていました。そして彼らは善の子女を繁殖するようになっていました。ところが、天使長を中心として性的な関係を結ぶことにより、悪の子女を繁殖するようになったのです。



(五) 罪の根とは何か？

罪の根とは、天使長とエバが霊的に不倫な血縁関係を結んだことであり、さらにエバがアダムと、時ならぬ時に血縁関係を結んだことです。エバが木の実を食べた後でアダ

ムにも食べさせたとあるのは、エバとアダムが性的関係を結んだことを意味しているのです。すなわち、アダムとエバは神がまだ祝福しない時に、天使長の非原理的な愛を動機として、性的な関係を結んだのです。その結果、アダムとエバから生まれる子孫は天使長(サタン)の血統になったのです。



文師は、エバの愛の器官を犯したことにより、悲惨な人類歴史が始まったと語っています。

エバの貴い善悪の本質となる愛の器官を犯したという、驚くべき事実が、聖書でいう「善悪の果を取って食べてはいけない」という訓示の教訓でした。それにもかかわらず、これを犯すことによって、最も悪なるものと最も貴いものの分岐点となりました。それが真の愛に連結されたところが天国であり、悪なるサタンと連結されたところが地獄となりました。滅亡の暗黒世界に落ちることを知りながらも、サタンが欲心を中心としてエバを強奪し、蹂躪することによって、人類歴史の悲惨な歴史が始まりました³⁶。

二. 人間始祖の墮落はなぜ(動機)、どのように(経路)なされたのか?

(一) 天使について

天使は人間や他の被造物より先に創造されましたが、天使の使命は何でしょうか? それは次のようです。

- ① 天の使い: 神のメッセージを人間に伝える使命です。
- ② 仕える霊: 家庭教師として、あるいはコーチとして、人間を育てる使命です。
- ③ 賛美者: 神のみ旨を讃美する使命です。

したがって、本来、天使は人間に仕える立場であり、人間が天使を主管するようになっていたのです。

(二) 動機と経路について

(1) 霊的墮落

天使長とエバの不倫を霊的な墮落と言います。天使長ルーシエルとエバの墮落のいきさつは次のようです。

天使長ルーシエルは、アダムとエバが現れる以前は、天界では、最も神に近く、最も高い位置にいました。ところがアダムとエバが現れると、神はアダムとエバを天使長以

³⁶ 文鮮明『祝福家庭』2005年秋季号、p.46。

上に愛しておられ、将来、アダムとエバは神の国の王と王妃になり、自分はその臣下になることが分かりました。

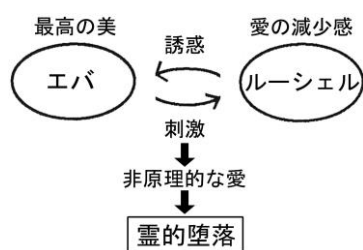
天使長ルーシエルはそこで愛の減少感を抱きました。神から天使長に注がれている愛は、以前と変わらないにも拘わらず、天使長が自分に注がれている愛とアダム・エバに注がれている愛を比較したとき、自分に注がれている愛が少なくなったように感じたのです。天使長がエバを見つめるとき、男性格のルーシエルにとって、エバは最高に美しく魅力的に見えました。そこで天使長は我を忘れてエバに言いよっていきました。そしてエバを自分のものにすれば、アダムを退け、アダムの位置を奪い取れるという不義なる思いを抱いたのです。そして知恵の天使であるルーシエルはあらん限りの美辞麗句を駆使して、エバに語りかけていきました。

文師は、天使長が自己の存在位置を離れて、アダム・エバを主管しようとしたと語っています。

ところが、僕として、赤ん坊を養育する使命的責任を担っていたにもかかわらず、責任遂行の立場を忘却し、アダムとエバを中心として、成長したのちに霊肉の実体を中心として、神様が心に入っていかれ、このすべての肉界と霊界を主管できる、愛の主人となることをサタンは知り、「自分もエバと共にこのように愛の因縁を結べば、かえってアダムに先立って、代を受け継ぐことができる」と考えたのです³⁷。

エバは幼いアダムよりも聡明で美しい天使長に惹かれていきました。そしてエバとルーシエルが何度も語り合っているうちに、許されない非原理的な愛が生じてきました。エバは本心において、神の戒めを破ることに不安と恐怖を抱きながら、結局、ルーシエルの愛に答えてしまったのです。これが霊的な墮落となりました。

霊的な天使と肉体を持っている人間エバが性的な関係を結ぶことは理解しがたいことかもしれませんが、聖書には、ヤコブが天使と一晩中、格闘したこと、淫乱の町ソドム・ゴモラの人々が天使を見て犯そうとしたことなどが書かれています。人間には霊(霊人体)がありますから、霊と霊の作用がなされます。その時、その作用が肉身に共鳴するすることがありえるのです。



(2) 肉の墮落

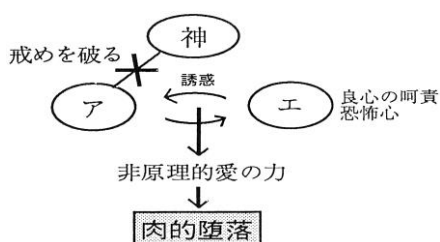
次にエバとアダムの間に、時ならぬ時の性的な関係が結ばれました。これを肉的な墮落と言います。

天使長ルーシエルと非原理的な愛で墮落したエバは不安と恐怖の中に墜ちていきました。そして自分が愛の関係を結ぶのは、天使長ではなく、アダムであることを悟りました。墮落していないアダムは天真爛漫で、エバにはまぶしく、美しく見えました。そ

³⁷ 『祝福家庭』2005年秋季号、p. 46。

してエバは、今からでも天使長から離れてアダムと一つになりたいと思うようになり、アダムに言い寄ったのです。あたかも天使長がエバに惹かれて、エバに言い寄ったように、エバはアダムに言い寄ったのです。

アダムがそのようなエバに相對していったとき、アダムとエバの間に、時ならぬ愛、非原理的な愛が生まれました。そしてアダムとエバは、肉体関係を結んでしまったのです。アダムとエバは本来、成長した後に、神の祝福を受けて結婚するようになっていました。しかし、時ならぬ時に、神の戒めを破って、天使長の非原理的な愛を動機として、結ばれてしまったのです。その結果、アダムとエバの子孫である全人類はサタンとなった天使長の血統下におかれるようになったのです。



三. 人間墮落の結果どうなったか

アダムとエバを墮落させた天使長は悪魔（サタン）になりました。そして天使長の誘惑によって墮落したアダムとエバとその子孫である人類は、ルーシエル天使長の全ての要素を受け継ぐようになりました。その中心は偽りの愛です。そしてアダムとエバから生まれた人類は、サタンに支配されるようになったのです。そのようなサタンの主管下にある人間にたいして、イエスは次のように語りました。

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。……彼は偽り者であり、偽りの父である（ヨハネ 8:44）。

へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができようか（マタイ 23:33）。

また日蓮も「この世界は第六天魔王の所領なり。一切衆生は、かの魔王の眷属（郎党）なり」と言いました。

四. 神話と墮落論

統一原理の墮落論の視点から見れば、神話の物語の真意が見えてきます。

(一)ギリシア神話と墮落論

ギリシア神話のパンドラの箱も、文字通りの甕ではなく、パンドラの愛の器官を意味していたのです。エデンの園で、神が善悪を知る木の実を食べてはならないと言われたのと同様に、ゼウスがパンドラの箱を開けてはならないと言われたのは、自分勝手に愛の器官を用いてはならないという戒めであったのです。

また、ギリシア神話には、オルフェウスとエウリュディケの物語があります。エウリュディケが蛇にかまれて死に、黄泉の国に行きました。後を追っていったオルフェウスはエウリュディケを地上に連れて帰ろうとしましたが、黄泉の国の支配者との約束を破

ったため、エウリュディケは再び黄泉の国に吸い込まれてしまいました。その後、オルフェウスは殺されて、黄泉の国に行きエウリュディケと再会します。エウリュディケが蛇にかまれて死に、黄泉の国に行き、後を追っていったオルフェウスも結局は、黄泉の国へ行ったというのは、墮落論のストーリーと一致しています。またオルフェウスがエウリュディケを失った後に、少年たちとの同性愛に耽ったのですが、その愛は真なる男女の夫婦愛が叶わなかったために生まれた屈折した愛であることを示唆しています。

(二)日本の神話と墮落論

日本の神話における、イザナギとイザナミの夫婦の交わりの中にも、エデンの園における、アダムとエバの墮落の物語に符合する点が見られます。

イザナミは陰部が焼けて死んで、黄泉の国（地獄）へ旅立ったといいますが、これはイザナミ、すなわち女性の始祖に、性的な問題があったことを示唆しています。すなわち、エバの墮落が性的なものであったことと符合します。そしてイザナギが黄泉の国へ下って行ったイザナミを追いかけていったが、汚れた妻の姿を見て、逃げていき、自らも汚れた身に禊を行ったというのも、墮落論のストーリーと一致しています。

またイザナミが先に唱えて、かたわのヒルコが生まれたのは、エバがアダムを誘惑して墮落させ、罪の子孫を繁殖するようになったことに符合します。そして、間違っていたことを悟って、夫婦の交わりをやりなおして、イザナギが先に唱えて正常な世界が生まれたのは、アダムとエバが神を中心とした本来の夫婦になることを意味していたのです。

因幡の白兔伝説を墮落論の観点から見れば、白兔の皮をむいたワニ(サメ)は墮落した天使長とその一味に相当し、皮をむかれた白兔は墮落したエバであり、広く人類を意味していると見ることができます。そして大国主神は後のアダムとして来られるメシヤを象徴し、ヤガミヒメは後のエバ、すなわち復帰されたエバであり、広くは復帰された人類を意味しているのです。

(三)聖典や神話の中にある永遠なる真理

時間的、空間的に離れて成立しているギリシア神話、日本の神話のなかに、このように聖書の墮落論と驚くべき類似点が見られるのは、注目すべきことです。天が、それぞれに靈感を与えたことを認めざるをえません。聖典や神話の中に隠された永遠なる真理が秘められているのです。

世界の主要な宗教における教祖、聖人たちの教えも、互いに一致しており、人類や民族の始祖に与えられた神の言とも一致していることが分かります。すなわち、神の人類救済の摂理の進展とともに、次第に規範に違反した刑罰は緩やかになり、今日では、各自が自由意志で規範を守るようになりましたが、依然として、宗教、民族、時代を超えて、神の言が実在し、人類を導いているのです。

IV. 真の愛へ導く神の言

一. 統一思想の規範観

今日、倫理・道徳を破壊する無神論、唯物論の嵐の中で伝統的な宗教や哲学の説く徳目は説得力を失い、その脆弱性を露呈しています。ここに無神論、唯物論を克服しながら、伝統的な宗教や哲学の教えを現代人にも納得できるように説明することのできる

理念が必要となります。次にそのような立場から、統一思想に基づいて規範の根拠を提示します。

(一) 神の言は愛の規範

宗教の教えは、フロイトが言うような、人間を抑圧するものではありません。神の戒め、ロゴス、天道と呼ばれるものは、真の愛を実現するための規範です。規範とは、愛が真に愛らしく現れるための愛の標識、道しるべ、愛の道です。すなわち規範は、真なる愛の実現のための、「愛の規範」なのです。

神の言（ロゴス）に従いながら、心情（真の愛）を中心として、生心と肉心が主体、対象の関係で円満な授受作用を行うようになれば、人間は真の人格者になり、真の夫婦となり、真の家庭を築くことができます（図 15）。

自由意志によって、規範を守るとき、愛が愛らしく、真の愛として実現されるのです。規範を守らない愛は、かえって破壊的な愛となります（図 16）。

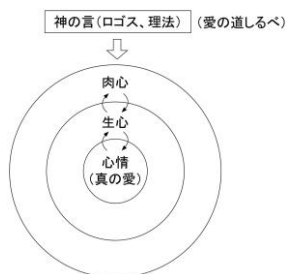


図15 神の言に従うことによる愛の人格完成

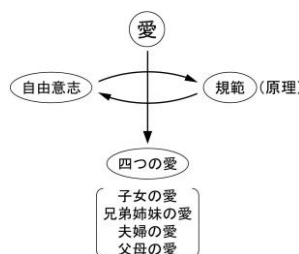


図16 自由意志に基づき、規範を通じた真の愛

(二) 宇宙の法則に裏づけられた規範

宇宙の秩序体系は宇宙の法則(天道)によって支えられており、家庭や社会の秩序体系は規範によって支えられています。そして宇宙の法則も、人間の規範も、神の言(ロゴス)から来たものです（図 17）。従って規範は便宜的につくられたようなものではなく、封建時代の遺物でもなく、余計なものでもありません。天地創造以来、宇宙を導いている自然法則が絶対的であるように、人間の守るべき規範も絶対的なものなのです。

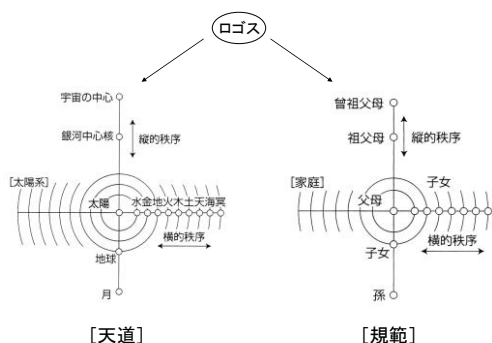


図 17 宇宙の法則に対応する規範

文師によれば、宇宙の法則(天道)は真の愛の道に即したものです。

天道とは何でしょうか？ 一言で天の伝統です。天に根を置く真の愛の実践の伝統

です。天道の人生は、世の中のすべての法を超越した崇高な人生です。したがって、真の愛に革命が必要ないように、天道にも革命がありません。皆様は、ただ真の愛の道、天道に従って「ために生きる」犠牲と奉仕の人生を実践しなければなりません。その道は神様の愛を爆発させる道です³⁸。

(三) 自然は真の愛の教科書

神は人間アダムとエバをモデル（標本）として万物を造られました。アダムとエバの身体をモデルにしたのみならず、アダムとエバによって完成しようとされた真の愛をモデルとして、万物を造られました。したがって、われわれは万物を通じて真の愛を学ぶことができるのであり、万物は「愛の教科書」なのです。

統一思想は、ダーウィニズムの弱肉強食の闘争理論ではなくて、愛の吸収理論です。万物は、小さいものは大きいものに吸収されていきます。それはより価値あるもの、より次元の高い愛へと上昇しているのです。そして究極的には、人間の愛の完成に貢献しようとしているのです。これを「愛の吸収理論」と言います。文師は次のように語っています。

愛の原理がペアシステムを通して創造された博物館がこの世界なのです³⁹。

アダムとエバは、ペアシステムでつくられた愛の自然の園を見ながら教育されつつ成長するようになっていました⁴⁰。

二. 統一思想の性と結婚観

それでは、なぜ今日、このような性倫理の崩壊状態になってしまったのでしょうか。それは、伝統的宗教や哲学において、なぜ離婚はよくないのか、なぜ同性愛はよくないのか、明確にできなかったからです。そこで統一思想の性と結婚観を紹介します。その根拠となるのは、神は一人の男性と一人の女性が合わさった存在であるということです。文師は次のように語っています。

旧約聖書の創世記第1章27節を見れば、「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」というみ言があります。この節を帰納的に推理してみれば、神様は、一人の男性と一人の女性を合わせた方である、という結論が出ます。このような神様が、独りでいるのは良くないと思われ、御自身の対象として創造したのが被造世界でした。すなわち、宇宙の万象は形状的な対象の位置に、そしてその中心には、実体的な対象として人間を創造されたのです。このように、神様の実体対象として創造した最初の男性格代表がアダムであり、女性格代表がエバです。⁴¹

夫婦は本来、神の姿に似るようになります。したがって統一思想から見た本然の結婚の意義は次のようです。

³⁸ 『ファミリー』 2005. 10. p. 26。

³⁹ 『ファミリー』1992年10月号。

⁴⁰ 「真なる愛と統一世界」、『文鮮明師とソ連革命』

⁴¹ 『天聖教』 p. 1386。

- ① 神の顕現：夫婦の中に神が臨在され、夫婦は男性と女性の二性が調和している神の姿に似るようになります。
- ② 宇宙万物の完成：万物は夫婦の愛のかけ橋であり、愛の環境を造ります。したがって愛の主人公である夫婦が完成した時、宇宙万物も完成するのです。
- ③ 人類の統一：夫婦の愛は人類愛に通じるものとなります。
- ④ 家庭の完成：夫婦の愛は家族全体を抱擁するものです。

ところが不倫、離婚などは、そのような結婚の理想を破壊するものです。不倫の愛、愛の分裂のなかには、神は臨在できず、運行できません。また、万物も共鳴できません。聖書には、「被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」（ローマ人への手紙 8:22）と書かれています。人間の歪んだ愛の中で万物も苦しんでいるのです。さらには、夫婦の愛がどんどん自己中心的になり、その結果、人類を分裂せしめ、家庭を破壊するものとなっているのです。すなわち本然の結婚観から見れば、不倫や離婚は次のような結果をもたらします。

- ① 神が臨在される夫婦でなく、神様を追い出すこととなります。
- ② 万物も喜ぶことができません。
- ③ 妻（夫）を否定することは全ての女性（全ての男性）を否定することであり、人類社会に亀裂が生じてゆきます。
- ④ 家庭内に不和が生まれ、家庭崩壊にまで至ります。

文師によれば、アダムとエバが神の祝福の下で結婚すれば、神はアダムとエバの形状をまとわれるのであり、アダムとエバは、夫婦として神の宮になります。

神様は、神様と人間が主体と対象として縦的な愛の関係を完成することだけを目標とされたのではありませんでした。縦的な愛を完成して、アダムとエバの横的な愛の結実をもたらそうとされました。その瞬間が、正に内的父母であられる神様が、外的父母であるアダムとエバと完全一体となるために臨在される愛の理想成就の瞬間です。無形の父母であられる神様が、アダムとエバの形状をまとして有形世界に永存する父母になるのです。この時、アダムとエバは真の父母、真の先祖になるのです⁴²。

墮落していない本然のアダムとエバは神様の体になり、人間世界の本聖殿になりました。そして後孫である夫婦も、みな聖殿、すなわち神の宮になったのです。

神様の愛を中心として一つになったならば、人間始祖は神様の体になります。アダムとエバは何者でしょうか。実体をまとした神様の体になるのです。それで、コリント人への第一の手紙に「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」（3.16）とあるのです。私たちの体は神様の聖殿です⁴³。

神様はフリーセックスではなく、一男一女主義です。したがって、神の宮となった夫婦には、不倫や離婚はありえないのです。不倫や離婚は神の宮を破壊する行為だから

⁴² 『天聖經』 86。

⁴³ 『天聖經』 1199-200。

です。

神様はフリーセックスではなく、絶対、一男一女主義を主張して、永遠不変の配偶を論議する家庭理想が出なければならないというのが私たちの結論なのです⁴⁴。

では、本然の結婚観から見て同性愛はどのような結果をもたらすのでしょうか。

- ① 神には同性愛はありえないので、同性愛の中に神は運行できません。
- ② 万物もみな、陽陰のペアになっています。したがって、同性愛の中に万物は共鳴できません。
- ③ 男同士、女同士で愛し合えば、人類の分裂になってしまいます。
- ④ 同性愛の夫婦は、健全な夫婦の愛、父母の愛を築くことはできません。また養子を得たとしても、その子は健全な子女の愛を育むことはできず、結局、健全な家庭を築くことはできないのです。

マザー・テレサも同性愛を戒めています。彼女 1995 年に北京で開かれた世界女性会議に宛てて次のようなメッセージを送りました。

男女の素晴らしい違いを否定する人たちは、神が造られたように自分たちを受け入れないため、隣人を愛することができません。彼らをもたらすものは、対立と不幸と世界平和の破壊でしかありません。

陽陰の調和によって愛と美が生じるのであり、男性と女性は、互いの特性を生かしながら、理想的な愛を育むようになっています。

- 男性的な愛と女性的な愛が調和することによって、美しい夫婦の愛が生まれます。
- 女性らしさは男性が好むものであり、男性らしさは女性が好むものであって、互いに相手のためにあるものです。
- 真の愛を実現するために、心身ともに、男は男性らしく、女は女性らしく造られているのです。

三. 純潔による真の家庭

(一) 愛の成長

生命に成長過程があるように、愛にも成長過程があります。植物は種から成長しますが、木が十分に成長してから花を咲かせて、実を結べば、完熟した立派な実が実ります。同様に、愛の成長において、子女の愛と兄弟姉妹の愛が十分に成長した後、人格を完成した一人の男性と一人の女性が、神と両親の祝福を受けて結婚し、夫婦の愛の花が咲けば、立派な子女が生まれ、健全な子女の愛と父母の愛が育まれます (図 18)。

⁴⁴ 第 26 回「神の日」のみ言 (『ファミリー』1993. 4)。

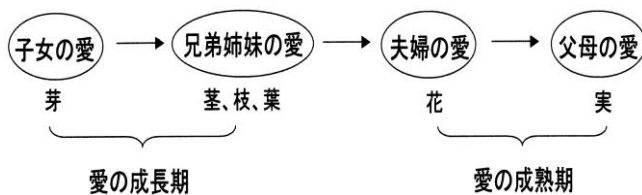


図 18 愛の成長

ところが植物が成長期の途中で花を咲かせると、花はそのまま散るか、未熟な実しか実りません。同様に、愛の成長期の途中で、男女が交われば、生まれた子供を十分な愛で育てることはできないのです。

本来、子女の愛、兄弟姉妹の愛が十分に育まれてから結婚するようになっています。そうすれば自分の相対者（配偶者）以外の異性を兄弟姉妹として見るようになります。子女の愛、兄弟姉妹の愛には不倫の要素はありません。ところが子女の愛、兄弟姉妹の愛が未熟なままで男女の関係を結べば、相対者以外の異性を兄弟姉妹として見るのではなく、男として、女として見て、不倫やフリーセックスに走りやすくなります。文師も、本来、夫婦の関係は兄弟姉妹の次元で始まるようになっていると語っています。

アダムの家庭を見ると、アダムとエバは共に同じ神様の息子と娘ですが、エバはアダムの妹の立場で出発しました。アダムはエバの兄の立場でした。しかし、彼らは成長して夫婦になったのです。同じように、夫婦間の関係は一つの血を分けた兄弟姉妹の次元で始まらなければならないのです⁴⁵。

そして文師は、夫婦の愛は花に相当すると語っています

男性と女性が祝福を受けて完全な愛を分かち合い、喜びを享受するとき、神様の目には、地上に咲いた花のようだというのです。また彼らの愛によって成されるすべての調和万象は、神様には香水のようなものです。神様は、このような美しい香りの中で暮らしたくて訪ねてこられるというのです⁴⁶。（下線は筆者）

（二）真の愛と偽りの愛

情熱的に一瞬のうちに燃えさかる愛は、やがて情熱の炎が消えて小さくしぼんでゆきます。男女が互いに条件の良い相手を求めて競い合っている巷の愛は、自己中心的な奪い合いの愛です。家庭を破壊する不倫の愛は、屈折した、よこしまな愛です。これらはみな偽りの愛です。すべての男女の愛が、このような偽りの愛一色であるわけではありませんが、いかに美しく見える男女の愛の中にも、必ずこのような偽りの愛の要素が内在しているのです。

男女の愛の中に、願わない偽りの愛が潜んでいることを追求した代表的な思想家はキルケゴールです。彼は次のように言います。

自然的な愛 [恋愛] は自身の内部に毒素を持っています（それは利己の愛の毒素です）。それは必ず醗酵をひき起こし、その醗酵の中に陥ち入らざるをえませ

⁴⁵ 『平和経』 1542。

⁴⁶ 『祝福家庭』 2003 年夏季号、77 頁。

ん⁴⁷。

日本の代表的な作家、夏目漱石も、男女の愛の中に潜む黒い影を追求していました。

「[男女の愛の奥底には] 結核性の恐ろしいものが潜んでいる」(『門』)

「恋は罪悪ですよ。そうして神聖なものですよ」、「私の後には何時でも黒い影がくっついていました」(『こころ』)

しかし男女の愛の中に潜んでいる毒素、黒い影が一体何であるか、彼らは明らかにすることはできませんでした。その正体を明確に解き明かしたのがまさに文師の墮落論でありました。人間は誰しも真の愛を求めています、願わない偽りの愛によって動かされています。それは次のような事実から知ることができます。

(1) 誰しも永遠なる愛を誓って結婚します。

結婚式では、「末永く」、「とわに」、「死が二人を分つまでは」と、永遠なる愛を誓います。期限を区切って結婚するような結婚式はありません。しかし、現実には、やがて愛が冷え切って、離婚する場合があります。

(2) 夫婦の愛は一对一

互いに「あなただけを愛します」と誓って、真の愛は成立します。不倫や三角関係になれば、愛は壊れてしまいます。文師も次のように語っています。

愛のパートナーは1対1

愛は絶対的であることを願うというのです。絶対というのとは一つです。二つではありません。絶対的だというのは永遠に一つだという意味です。愛のパートナーは、一人の男性と一人の女性だけを許容するというのです。それゆえに、神様がアダムとエバを一人ずつ造られたのです⁴⁸。

夫婦の愛は分けられない

人間は本性的に自らの相対の、自分に対する愛が分けられることを願いません。夫婦間の横的な愛の関係は、父母と子供の間の縦的な愛の関係と異なり、分けられればもはやその完全性が破壊されます。これは夫婦間で絶対的な愛の一体を成すようになっている創造原理ゆえです。人は絶対に自分の相対のために生きるべき愛の責任があります⁴⁹。

心の中にいるのは永遠に一人

誠実で美しく、香りが漂う、花のような女性の心の中には、男性が二人いるのではありません。絶対的に一人であり、それから唯一的に一人であり、変わらず不変的に一人であり、永遠的に一人であることを願うのです。[同様に、男性の心の中にいるのも永遠に一人の女性です]⁵⁰。

⁴⁷ キルケゴール『愛について』

⁴⁸ 『宇宙の根本』272。

⁴⁹ 『祝福家庭と理想天国 I』p. 31。

⁵⁰ 『ファミリー』2002. 11. 36。

(3) 父母の離婚を願う子女はいない。

子どもは一人の父、一人の母が永遠に愛し合うことを願っています。親が離婚再婚を繰り返せば、生みの親以外に、義理の親が複数できます。子どもは、そのようなことを願いません。しかし現実はそのような場合が多くなってきています。文師も次のように語っています。

母親が二人、父親が二人いれば、よいと思う人はいない

皆さん。“母親が二人いれば、よい”と思う人はいますか？ 一度に二人の母親のおなかに入って行って、生まれることができますか？ ありえないというのです。

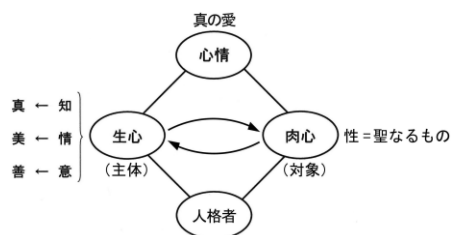
“父親が二人いれば、よい”と思う人はいますか？ 二つの種をもらって、必要な娘なら娘を生むことができますか？ 父親の精子も絶対的であり、母親の卵子も絶対的なのです。唯一的であり、不変的であり、永遠であるというのです。これさえ知れば、今日の世の中が、どれほど悪い世の中になったのか、自動的に結論が出てくるのです⁵¹。

(三) 絶対的な性

性についても同様に、真なる性と不倫の性があります。不倫の性とは、自己中心的な性です。それは自分の意のままに、欲望のおもむくままに、性行為を行うことであり、フリーセックスにほかなりません。自分の妻以外の女性と関係する性、自分の夫以外の男性と関係する性も、不倫の性です。それらはみな偽りの愛と結びついたものであり、家庭を破壊するものです。

それにたいして真の性は相対のための性です。すなわち夫の性は妻のためのものであり、妻の性は夫のためのものです。それは夫と妻が互いに貞節を守る性であり、それを「絶対的な性」と言います。そのような絶対的な性にもとづいて、真なる夫婦の愛が成立するのです。

フロイトは、性的エネルギーの宿るイドは悪しき衝動であって、エゴで抑圧しなくてはならないと説きました。しかし統一思想から見れば、性は本来、悪しき衝動ではありません。真の愛を中心として、生心と肉心が主体と対象の関係で、円満な授受作用を行うとき、性は聖なるものとなるのです（図19）。



- 「真の愛を中心とすれば、体(肉心)は心(生心)に共鳴する」
- 「性は聖なるものである」

図19 真の愛の下では、性は聖なるもの

⁵¹ 『ファミリー』2004. 1. 38。

四. 現代に蘇る神の言

(一) 現代に生きている神話

崩れゆく家庭、社会を立て直し、神の願われる創造理想世界を実現するためには、何よりも、真の家庭を築かなくてはなりません。そのためには、性解放に通じるヘレニズム思想を克服しなくてはなりません。なかでも、ギリシア神話の中に性解放理論の源流を見ることができます。

ニーチェはキリスト教道徳を奴隷の道徳であると批判し、ギリシアの英雄たちを理想としました。マルクスは神に反逆したプロメテウスの精神で立ち上がりました。ダーウインの進化論もマルクスの共産主義思想と時を同じくして現れましたが、両者ともに闘争を発展の原動力と見るギリシア思想すなわちヘレニズムを源流としていました。

フロイトのいうエディプス・コンプレックス——母親に恋をし、父親に嫉妬する幼児期の心理——とは、運命のいたずらで、父を殺して、母と結婚することになった、ギリシア神話のエディプス王の物語に基づいたものです。統一思想から見ると、ギリシア神話に由来するエディプス・コンプレックスとは、子女が父母を愛する子女の愛に、ゆがんだ性愛を混入させたことから生じたものであり、心の中の暗闇に焦点をあてたものです。本来、子女が父母を愛する愛も、父母が子女を愛する愛も、兄弟姉妹の愛も、性愛とは無関係なものです。しかるに人間始祖アダム・エバの墮落によって、墮落した男女の愛が、愛全体の中に混入するようになったのです。その結果、近親相姦が生まれ、エディプス・コンプレックスのようなものも生まれたのです。ギリシア神話に基づいて、フロイトは墮落した愛、ゆがんだ愛を見つめたのです。

マルクーゼはオルフェウスとナルシスの世界を、自由の世界、エロスの解放、ニルヴァーナとして賛美します。オルフェウスとナルシスの世界は、完全なエロスを求めるために、正常なエロスを斥け、秩序を否定します。オルフェウスから、同性愛が始まったと言われています。オルフェウスとナルシスの神話は、神の言(戒め、ロゴス)に反抗して、自由な性と同性愛を美化するものであり、墮落した天使や霊人たちが、自分たちの世界を美化しようとして造りあげたものといえます。マルクーゼは、そのような神話を源流としていたのです。

フランクフルト学派は、ホメロスの『オデュッセイア』(Homer's Odyssey)——トロイ戦争(Trojan War)で活躍し、故郷に帰る航海でセイレーン(Sirens)の魔術的な歌声などの誘惑に打ち勝ったオデュッセウス(Odysseus)が、やがて残虐な復讐の暴君になる物語——を題材にしながら、理性の道具化、理性の腐食を告発しています。

現代フランスの代表的な哲学者フーコーは、キリスト教に代表される性倫理が普遍的、絶対的なものでないことを示すために、古代ギリシアにおける、性に対する倫理観の研究を行いました。そしてフーコーは、三部作の『性の歴史』を著していますが、彼自身の同性愛を正当化しようとするものにはほかなりません。

フーコーによれば、古代人にとっては、性はその本性からして良いものであり、同性愛に関しても、古代の性倫理は同性愛それ自体を邪悪で非自然的な行為とする、キリスト教的な糾弾とは無縁であったと見ています。同性愛は法律によって許されていたと言います。

フーコーは、近代社会で性行為がこのような否定性の刻印をおびているのは、キリスト教の道徳において、性というものが人間の原罪と結びつけられたからであったと指摘し、キリスト教道徳を悪魔の仕業と見なしています。フーコーは、人間の原罪を認めたくないために、また自己の同性愛の性癖を合理化したいために、キリスト教道徳を激

しく非難しました。そしてフーコーは、同性愛を通じて、他者との関係性を多様化し、他者との間で友愛に満ちた新しい関係を模索すると説き、「キリスト教は、愛については、饒舌に語ったが、朋友愛については、まったく理解しなかった」と語っています。しかしながら、朋友愛（兄弟愛）を同性愛と同一視するのは大きな誤りです。同性愛は兄弟愛の倒錯したものであって、正常な朋友愛（兄弟愛）とは何の関係もないものです。

ギリシアの神々は真なる神ではありません。その多くはルーシエルとともに墮落した天使たちであり、英雄たちの霊でもありました。彼らは自分たちの屈折した愛を美化しながら、今なお人間を誘っているのです。

ここに文鮮明師が解明された墮落論の視点からギリシアの神話と哲学を正しく評価することが必要です。そして真の愛に基づいて、その歪みを正してゆかなければなりません。ギリシアの神話や哲学は過去のものではなく、霊界から影響を及ぼしながら現代に生き続けているからです。

（二）絶対愛と絶対「性」の宣言

墮落した世界においては、男性も女性も自分の愛の器官を自分の意のままに用いる場合が多いのですが、真の夫婦の愛は、一対一で成立するようになっているために、神は、夫婦の愛の器官の主人をそれぞれの相対になされたというのです。文師によれば、

神様は知恵の大王であられるために、男性と女性の愛の器官をそれぞれ取り替えてくださったのです。男性のものだといっても、その主人は男性ではありません。女性の場合も同じです。主人を差し置いて自分の思いのままに行動した人は、愛に背いたことに対する審判を受けなければならないのです⁵²。

パウロも同様なことを語っています。

妻は自分のからだを自由にはできない。それができるのは夫である。夫も同様に自分のからだを自由にはできない。それができるのは妻である。（コリント I 7:4～11）

人間の愛の器官である生殖器は真の愛が成立するための基盤となっています。文師によれば、生殖器は「生命の王宮、愛の王宮、血統の王宮」であります。

人間の生殖器は、限りなく神聖な所です。生命の種を植える生命の王宮であり、愛の花を咲かせる愛の王宮であり、血統の実を結ぶ血統の王宮です。この絶対生殖器を中心として、絶対血統、絶対愛、絶対生命が創出されます。絶対和合、絶対統一、絶対解放、絶対安息が展開するのです⁵³。

絶対「性」による絶対愛（真の愛）の実現について、次のようにまとめることができます。

- 愛は絶対、唯一、不変、永遠であることを願います。
- 一人の男性と一人の女性が、神の縦的な愛を中心として愛し合うとき、真の愛は

⁵² 『天国を開く門・真の家庭』 p. 95。

⁵³ 『天聖教』 p. 1400。

実現されます。

- 夫の生殖器の主人は妻であり、妻の生殖器の主人は夫です。
- 生殖器は神様の縦的な愛につながる神聖な本宮です。
- 絶対夫婦における絶対「性」によって絶対愛（真の愛）が実現されます。

今こそ、絶対「性」の教育革命がなされなければなりません。文師は宣言しました。

神様が人間始祖のアダムとエバを創造して与えてくださった、唯一の戒めは何だったのでしょうか。天が許諾する時までは、お互いの「性」を絶対的基準で守りなさいという戒めであり、祝福でした。善悪の実を取って食べれば必ず死に、取って食べずに天の戒めを守れば、人格完成はもちろん、創造主であられる神様と同等な共同創造主の隊列に立つようになり、さらには万物を主管し、永遠で理想的な幸福を謳歌する宇宙の主人になるという聖書のみ言は、正にこの点を踏まえて語ったことです。婚前純潔を守り、真の子女として天の祝福のもとで結婚して真の夫婦となり、真の子女を生んで真の父母になりなさいという祝福だったのです。……

第二の基準は、夫婦間において、生命よりも貴く守るべき絶対「性」のモデル、すなわち絶対貞節の天法です。夫婦は、天が定めてくださった永遠の伴侶として子女を生むことによって、真の愛、真の生命、真の血統を創造する共同創造主の、絶対、唯一、不変、永遠性の本源地なのです。独りでは、千年を生きても子女を生むことができないというのが天理だからです。婚前純潔を守り、純粋な天の夫婦として結ばれた人たちが、どうして天道を外れて浮気をすることができるのでしょうか。……

絶対「性」は、天が人間に賦与された最高の祝福です。絶対「性」の基準を固守しなければ、人格完成、すなわち完成人間の道を行くことが不可能だからです。さらには、神様も人格神、実体神の位置を立てるためには、完成した人間を通して真の家庭的絶対「性」の基盤を確保しなければならないからです。

絶対者であられる神様が、私たちの人生を直接主管され、私たちと同居し、共に楽しまれるためには、御自身の対象であり、子女として創造した人間が、神様のよう

に絶対「性」の基準で完成した家庭の姿を備えなければならないという意味です⁵⁴。

人類歴史の始まりは、創世記のエデンの園の物語とギリシア神話というヘブライズムとヘレニズムの戦いから出発しています。そして今日、ヘブライズムとヘレニズムの最後の熾烈な戦いが行われています。すなわち、再臨主として来られた文鮮明師の解明された墮落論、絶対「性」・絶対愛の宣言と、ギリシア神話を源流とする性解放理論との戦いです。最初の戦いは人類歴史のアルファであり、最後の戦いはオメガです。そしてヘブライズムの最終的勝利と共に、神の理想である新天新地が到来するのです。

⁵⁴ 『天聖教』 p. 1392-3。